

Mulācāra 第六章と Piṇḍanijjuttī

奥田清明

(一)

Vaṭṭakera 本(以下 V. と記す)と Kundakunda 本(=K.) という二系統の伝本によつて伝わる空衣派最古の聖典 Mulācāra (=Māc.) は、全十二章からなり、その第六章は、V. に対する註釈家 Vasunandin (=Vasun.)¹⁾ や K. の註釈家 Phakkule²⁾ によつて、Piṇḍa-suddhyadhikāra と題されている。そしてそれは、V. によると、

1 piṇḍa-suddhi を説く意志の表明

2 piṇḍa-suddhi の概念規定(即ちそれは、[I] uggama-, [II] uppāyaṇā-, [III] esaṇā- (狭義の), [IV] saṃjoyaṇā-, [V] pamāṇa-, [VI] iṅgāla-, [VII] dhūma-, [VIII] kāraṇa- の八 dosas を離れたところに成立する)

3f. [I] の uggama-d. の総数(即ち 16) 明示とその名称列挙(即ち ādhākamma 等。しかし、全部で 17 が数えられている)

5ff. 各 uggama-d. の解説:

5 ① ādhākamma; 6f. ② uddesiya; 8 ③ ajjhovajjha; 9 ④ pūdikamma; 10 ⑤ missa; 11 ⑥ ṭhāvida; 12 ⑦ bali; 13f. ⑧ pāhuḍiya; 15 ⑨ pādukkāra; 16 ⑩ kiya; 17 ⑪ pāmicca; 18 ⑫ pariyatṭa; 19ff. ⑬ abhihaḍa; 22 ⑭ ubbhinna; 23 ⑮ mālāroha; 24 ⑯ acchejja; 25 ⑰ aṇisaṭṭha

26f. 16 の [II] uppāyaṇā-d. の名称列挙(即ち dhādi 等)

28ff. 各 uppāyaṇā-d. の解説:

28 ① dhādi; 29 ② dūdi; 30 ③ nimitta; 31 ④ ājīva; 32 ⑤ vaṇīvaga; 33 ⑥ tigicchā; 34f. ⑦ koha, ⑧ māṇa, ⑨ māyā, ⑩ lobha; 36 ⑪ puvvī santhudi; 37 ⑫ pacchā santhudi; 38 ⑬ vijjā; 39 ⑭ manta; 40 vijjā と manta; 41 ⑮ cuṇṇa; 42 ⑯ mūla-kamma

43 [III] esaṇā-d. の総数(即ち 10) 明示とその名称列挙(九つのみ! nikkhitta が欠ける)

44ff. 各 esaṇā-d. の解説:

- 44 ① saṅkiya; 45 ② makkhiya; 46 ③ nikkhitta; 47 ④ pihiya;
 48 ⑤ saṃvavaharaṇa; 49ff. ⑥ dāyaga; 53 ⑦ ummissa; 54 ⑧ apa-
 riṇaya; 55 ⑨ litta; 56 ⑩ chaṇḍiya
- 57 [IV] saṃjoyaṇā-d. と [V] pamāṇa-d. の解説
- 58 [VI] iṅgāla-d. と [VII] dhūma-d. の解説
- 59ff. [VIII] kāraṇa-d. の解説
- 63f. 総括: 摂つて良い asaṇa の抽象式な指示(即ち上の 47 d. と以下の 14 malas を離れた, 九 koṭṭis に関して咎のない食物を摂れと言う。なお, 九 koṭṭis 云々の食物とは, 身・口・意の何れによつても, 自分の為に自ら作つたり, 人に作らせたり, 人が作っているのを承認したりして得たものではない asaṇa を意味する)
- 65 14 malas の名称列挙
- 66ff. davva に関してだけでなく, bhāva に関しても咎なき食物を摂れという指示とその理由の陳述(この場合, davva に関して咎なき食物とは生き物の含まれていない食物を言い, bhāva に関して云々とは, 自分の為に作られたものではない食物を指す)
- 69 全 piṇḍa-d. の二分化(即ちそれは, davva に関する d. と bhāva に関する d. に分けられると言う)
- 70 摂つて良い食物の示唆 (esaṇā-samii に従つて得た食物や, nivviyaḍa, avaṇḍaṇa がそれである)
- 71 esaṇā-samii の nikkheva
- 72 食物の量の決定(即ち胃を占める食物と水と空気の割合)
- 73 食事時間の指定
- 74f 行乞時における諸注意
- 76ff. 食事をしてはならない諸々の場合の列挙
- 82 Mahāvīra と sādhus への祈請
 をその内容としている。

ところで, K. の verse number は上のものとは少し異なり, vv. の総数は 78 で, それには V. に存在しない vv. の「入り」と, V. 76-81 の「出」が見られる。そこで, 今それを明示するために両者の concordance を記すと, それは次のようになる。

V.:	1~29,	30,	31~73,	欠,	74f.,	76~81,	82,	欠
		卍						
K.:	1~29,	30,	31~73,	74,	75f.,	欠,	77,	78

既に拙著において³⁾, V. が die ursprünglichere Version であることが解明されているので, ここでは K. の 74⁴⁾ と 78⁵⁾ が後に挿入された vv. で, V. の 76~81⁶⁾ は K. では除外されていることを指摘するに止めるが, この事はしかし, 私の所持する V. が全て, 本来の text を伝えているということを意味するのではない。K. の一写本 (即ち k¹⁾⁸⁾ だけが正しい text を示している場合もある。

例えば V. 43 は, K¹ に見られる姿が正しい。即ち V¹⁻² と K⁸⁹⁾ は, それを

saṅkida makkhida pihidaṃ	saṃvavaharaṇa dāyag' ummisse
aparīnada litta choḍida	esaṇa-dosāi dasa ede.
ab) pihida saṃ. K ⁸	

と記すが, これでは b) が unmetrisch である上に, a~c) に出る dosas の数が九つであつて, これは d) の「これらが 10 の esaṇā-d. である」という言葉に一致しない。

一方 K¹ は, その ab) がmakkhida nikkhitta pihida sāharaṇa dāyag' ummisse, d) が esaṇā-dosā du dasa ede. とあつて, 我々はこれによつてはじめて, 内容的にも韻律の点でも perfect な text を得ることができる。しかもそれは, 白衣派の Piṇḍa-nijjuttī (=Pn.)¹⁰⁾ 520=Mahānisīha III. 44. 8 の v.¹¹⁾ にほぼ完全に一致する。僅かな違いは, 前者が sāhariya ではなく, sāharaṇa という術語を採用している点のみある。

このように, v. 43 において K¹ のあり方が正しいとすると, v. 48 に関しても同様のことが言われなければならない。即ち V¹⁻² と K² は, 前回のように等しく同一の偈:

saṃvavaharaṇaṃ kiccā	padādum idi cela-bhāyaṇāḍiṇaṃ
asaikkhiya jaṃ deyaṃ	saṃvavaharaṇo havadi doso.
d) havadi eso K ⁸	

を伝えるが, ひとり K¹ のみが, d) を sāharaṇo so havadi doso として, v. 43 の sāharaṇa を受けている。

以上のように K¹ は, それが K. 系統の写本であるにも拘らず, 時にはこれのみが, original version を保持していることがあるのである。

(二)

ところで, Māc. 第六章は, 既に E. Leumann¹²⁾ が指摘したように, その幾つかの vv. が白衣派伝 Pn. に parallel を見出し, しかも骨子をなす vv. は, 両者ほぼ一致するので, 第六章は空衣派伝 Pn. と言われる。

しかしながらこのことは, 白衣派伝 Pn. が original で, 第六章はそれを受け継いだということを意味しない。白衣派の Pn. は全 671 偈からなり, それが元であるというには vv. の数が多すぎるし¹³⁾, また八 dosas やその細目に関して, その解釈が第六章のものとは違いすぎる¹⁴⁾。

一方, 第六章を白衣派 Pn. の依拠とするのも, これまた不可能で, その理由の一つに, 上の「八 dosas の細目云々」が挙げられるし, また白衣派 Pn.¹⁵⁾ は, それが ① piṇḍa の解説, ② esaṇā-nikkheva (davva-es-, bhāva-es. 等), ③ bhāva-es. (=八 dosas を離れること) の解説という三部分からなるのに対して, 第六章は①八 dosas の解説と②その付記という形をとっており, こういう構成上の違いも, 両者に貸借関係がないことを示唆する。

いずれにせよ我々は, 現存 Pn. や Māc. 第六章を, それぞれ他の直接の拠り所とすることはできず, かくして両者とその大本をなす text との間に, 空, 白二派の別々な tradition の存在を予想せざるを得ないのである。

では一体, 現存 Pn. と第六章では, どちらが original に近い text を伝えているのであろうか。

この問いに答えるのは, 先にも述べた通り, 47 の dosas の解釈が両者において違いすぎるので, それは容易なことではない。

そこでここでは, 両本に parallel のある vv. に的を絞って, その問いの一部に答えることにしたい。

まず第六章の第二偈 (=6.2) と Pn. 1 についてであるが¹⁶⁾, 両者の大きな違いは, その d) に, 前者が aṭṭhavihā に続いて piṇḍa-suddhī という術語を採用し, 後者が piṇḍa-nijjuttī という読みをとっている点にある。

第六章が空衣派伝 Pn. であることは疑問の余地がないので, その意図するものが何であれ, 一旦それを Pn. という立場に戻すと, program を記すこの v. は, 現存 Pn. のように d) は -nijjuttī でなければ意味をなさないし, piṇḍa-suddhī という technical terms は, それは白衣派の知らぬ用語であるから¹⁷⁾, このような特殊な表現をもつ 6.2 は, 成立の遅い, 空衣派内で読みかえられた v.

と理解せざるを得ないのである。

次に uggama-dosas の名称を数える 6. 3f. と Pn. 92f. であるが、前者はその 3 と 4abc で、17 の dosas を数え上げている。ところがその 4d は、「以上が 16 の uggama-d. である」と言つて、それは 3aff. の内容と矛盾する。総数を 16 とするのはジャイナ教の伝統であるから、4d を除く 3aff. に間違いがあるのだが、一体何が新たに加えられたのであろうか。

それを見出すには、3f. と 92f. とを比較し、さらにそれらに続く、17 (16) dosas を解説する vv. を、空、白二派の間で見比べて、何が Pn. に欠けるかを見れば良いのであるが、そういう手続きを経て浮び上ってくるのは bali-d. である。

ところで、空衣派の伝統内に住む Vasun. と Phaḍkule は、一つが余分であると気付いたまでは良かったが、何を除外すべきかが判らず、揚句の果ては、最も重大な uggama-d. である ādhākamma を除くべきだと考えてしまった¹⁸⁾。勿論それは誤りである。

上のように、bali-d. が新に加わつた d. と判明した今、当然なことであるが、それを解説する 6. 12 も新しい v. と言わなければならない。

uppāyaṇā-d. に関する vv. はどうかと言うと、6. 26f. や Pn. 408f. がこの dosa の細目を記し、その解説は、前の b. の場合同様、続く諸偈がそれをを行なうが、先ず 408f. と 6. 26f. の間にはかなり大きな差違が見られ、前者が

dhāi dūi nimitte	ājīva vaṇimage tigicchā ya	
kohe māṇe māyā	lobhe ya havanti dasa ee.	(Pn. 408)
puvviṃ pacchā santhava	vijjā mante ya cunṇa joge ya	
uppāyaṇāi dosā	solasame mūla-kamme ya.	(Pn. 409)

という text を示す時、後者はそれを

...	ājīve vaṇivage ya tegimche	
kodhī maṇī māyī	lobhī ...	(6. 26)
... santhudi	...	
...	solasamo ...	(6. 27)

と改め、e-Nominative からの脱却という新しい傾向を覗かせる (26b は例外)。

この dosa においても、その細目の総数は 16 であるが、何を以て 16 とするかは、上の偈を見るだけでは必ずしも明確にならないので、Pn. 410ff. や 6. 2ff. を調べて、その dosas を抽出すると、それは Pn. では、① dhāi, ..., ⑩ santha-

va, ..., ⑭ cuṇṇa, ⑮ joga, ⑯ mūla-kamma が考えられている。

一方、第六章においては、上の内容紹介の所で名を挙げられたものが16の dosas とされ、puvvī santhudi と pacchā santhudi は別々の概念と見られている。Pn. の⑮、即ち joga は、ここでは無視されている。

Pn. の数え方は Mahānisiha¹⁹⁾ にその支持があるが、V. にはそのようなものがなく、その上、joga の等閑視は決定的な過誤であるから、我々は Māc. を original version とすることはできない。

むしろ Pn. の方が名称列举の vv. のみならず、dosas の理解においても original 乃至それに近いものを伝えているのである。

saṃjoyaṇā-d. と pamāṇa-d. を解説するためには、Māc. は僅か一偈でもつてそれを行ない、Pn. は19偈を費すので、両者の新古は簡単には述べられないが、第六章の方がより古いものを伝えていると言いはし難い。即ち、今まさに述べたように、これらの dosas に関して、第六章はたつた一偈で以てそれを説明するが、これは、他の dosas が各々、少なくとも一偈をもつて解説されている²⁰⁾ 事実を考えると、それは不自然である。

完全には一致せず、加えてその内容は貧弱すぎるが、6. 57は、Pn. 638ab と 644cd の combination によつて成立したものではなからうか。

第八の kāraṇa-d. に関しては、その説明に第六章は四偈、Pn. は六偈を用意している。両者の関係は以下の様で、parallel をなす vv. は各々三つである。

Pn.	661,	662,	663f.,	665,	666,	667,	欠
第六章	59,	60,	欠,	欠,	61,	欠,	62

食事をしたり断食したりするには、それぞれ六つの理由があると announce する 661=59 に続いて、662=60 は、食事を摂る六因を羅列し、続く 663f. がそれを一つ一つ解説するが、この 663f. は Abhayadeva によつて bhāṣya-gāthās と呼ばれ、Prof. Alsdorf²¹⁾ もそれを承認してられる。従つて 663f. は Nijjutti の vv. ではなく、Bhāsa の段階に属する成立の新しいものだとは判断して良いであろう。

663f. が bhāṣya-g. なら、666 に記された断食の六因を解説する 667f. も同様に bhāṣya-g. で、これらは本来の Nijjutti には存在しなかつたものである。

ところで、第六章におけるように、Pn. 662 (=6. 60) の次に直ちに 666 (=6. 61) が続けば、挿入されることのなかつた偈は 665 である。663f. が間に入ったために、666 への導入の v. が再度必要になり、そのために 655 という Śloka の

古い偈が差し込まれた。既に Prof. Alsdorf²²⁾ は “...we can infer with tolerable certainty that there was an original version where not only the announcements but also the two lists of six reasons each for eating and fasting were composed in Śloka.” と言つていられる。

一方、第六章も新しい v. を所持しており、それが 62 である。これは食事をする理由を述べるものであるが、この問題は既に 60 で扱われているので、v. 62 は余分な verse である。

さて、parallel をなす偈については、両本の間でいかなる関係が見られるかという本題に戻るが、この kāraṇa-d. においても、我々は Pn. の方にその古さを認めることができる。即ち、662=60 や 666=61 の parallel を他者に求めると、parallel の全ては Pn. の vv. に合致し、しかもそれが Ṭhāna という聖典にも存在するのである²³⁾。

以上、紙数の制限のため、ごく僅かの gāthās しか扱えなかつたが、Pn. と第六章の間で parallel をなす vv. は、全部 Pn. のものが original か、あるいはそれに近い text であると言ふことができたかと思う。

1) Vaṭṭakera, Mūlācāra+Vasunandin 註. ed. by Paṇḍits Pannalāl & Gajāharlāl Śrīlāl.=Māṇikcand Digambar Jain Granthmālā 19, Bombay 1921, p. 329.

2) Kundakunda, Mūlācāra+Phaḍkule 註. =Śrī Devcand Rāmcand Granthmālā 1, Śolapur 1944, p. 240.

3) K. Okuda, Eine Digambara-Dogmatik, Wiesbaden 1975, p. 7 ff..

4) 74 の内容は 73 と同じ。

5) 77 では、Mahāvīra と sadhu 達に対して祈禱が捧げられるが、78 では、その内、Mahāvīra がとり上げられ、彼に祝福がおくられる。

6) V. の 76~81 は、K. では第一章に現われるが、それが不適切であることは、拙著 p. 8 参照。

7) 註 1 に記された text の外に、Vaṭṭakera, Mūlācāra+Manoharlār の註. =Muni Anantakīrti Digambar Jain Granthmālā 1, Bombay 1919.

8) Mūḍbidri の Jain Maṭh 所蔵の写本 (Kannaḍa-prāntiya-tāḍapatriya-grantha-sūci No. 287)。詳しくは拙著 p. 34.

9) =註 2。

10) Piṇḍanijjutti + Bhāṣya + Malayagiri の Vivaraṇa. =Dvcand Lālbhāi Jain Pustakoddhār 44, Bombay 1918.

11) J. Deleu, Studies in the Mahānisiha. Chapters I-III of the Mahānisiha. printed at J. J. Augustin, Glückstadt 1963, p. 70.

12) E. Leumann, Übersicht über die Āvaśyaka-Literatur, Hamburg 1934, p. 16.

- 13) 事実, bhāṣya-gāthās が入り込んでいる。本文 p. 452 参照。
- 14) 例えば pamāṇa-d. に関して, 6.57 cd は「量を越して食べることが, 過量に摂るといふ罪である」といい, その註と v. 72 は, 「胃袋の $\frac{2}{4}$ は固形食物で満たし, $\frac{1}{4}$ は水のため, 残る $\frac{1}{4}$ は空つぽにせよ」(意識。以下同じ)と教えるが, Pn. は, 一度の食事に三十二口以上食べたり, そのように多量を連日摂つたり, 油こいものを食べたり, 何度も食事することが pamāṇa-d. であると述べ, 酷暑期には, 胃の $\frac{2}{6}$ が固形食物, $\frac{3}{6}$ が水, $\frac{1}{6}$ は空気; 暑期, 寒期, 及び暑くも寒くもない時期には, 胃の $\frac{3}{6}$ が食物, $\frac{2}{6}$ が水, $\frac{1}{6}$ が空気; 厳寒期には $\frac{4}{6}$ が食物, $\frac{1}{6}$ は水, 残る $\frac{1}{6}$ が空気で満たされるようにせよと命ずる。

また dhāi-d. について, Māc. と Pn. は, その dhāi の分類において, 共にそれを, ① 子供の身体を洗う乳母, ② 飾る乳母, ③ 子供と遊ぶ乳母, ④ ミルクを飲ませる乳母, ⑤ 子供に添い寝をする乳母と分ける点で共通するが, では何をすれば罪になるかという問いに関しては, 違つた考え方を示している。即ち前者は, 「これら五種の乳母の働きをすることによつて食物を得ると, dhāi-d. が成立する」(6.28) というのに対して, Pn. は, 例を乳を飲ませる乳母にとつた場合, 以前から知つている家にやつて来て, その家で泣いている子供を見て, その母に, 「この子は今なお乳を食としているが, 今, 乳を得ることができずに泣いている。だから, 先ず私に食物を与え, 次いで彼に乳を飲ませよ」と言つたり, 「先ず彼に飲ませ, 次に私に食物を与えよ」, 「私は今いらないので, 彼に乳を飲ませよ。私は後で来る」(412) 「この世で得にくいことは息子の顔を見ることだ。彼に乳を与えよ。お前が授乳しないなら, 私が飲ませよう。あるいは人を使つて飲ませよう」(413) と言うことがその dosa であるとする。また, 托鉢の途中, ある元氣のない śraddhikā を見て, 「お前は どうして悲しそうにしているのか」と問い, 彼女が「私はかくかくしかじかの家で乳母をしていたが, 追い出された」と答えるのを聞いて, 彼女の元の雇用者の所に行つて, 新に雇用された乳母について悪口を言い, 彼女を首にさせ, 元の乳母を再びその地位に就かせる (415 ff.) ことも④の dhāi-d. であるという。

- 15) その構成については, A. Mette, Piṇḍ'esaṇā, Wiesbaden 1973, p. 17 ff..
- 16) piṇḍe uggama uppāyaṇ' esaṇā joyaṇā pamāṇaṃ ca /
 iṅgāla dhūma kāraṇa aṭṭhavihā piṇḍa-nijjutti //
 ab) uggama uppādaṇa esaṇaṃ ca saṃjojaṇaṃ pa. Māc.;
 d) piṇḍa-suddhī du Māc..
- 17) piṇḍa-visohi という用語はある。Deleu op. cit. p. 70, Ohanijjutti Bhāsa 3 等。
- 18) 例えば Phaḍkule は, ādhākamma について, それを āṭṭh prakār ke piṇḍa-suddhi ke doṣaṃ se bhinn he. yeh mahādoṣ he. とする。
- 19) Deleu op. cit. p. 70.
- 20) iṅgāla- と dhūma-d. も一偈でもつて説明されるが, これらは古くは一つの dosa と見なされていた。拙著 p. 129 参照。
- 21) L. Alsdorf, The Āryā Stanzas of the Uttarajjhāyā, Wiesbaden 1966, p. 196.
- 22) Ibid. p. 197.
- 23) Ibid. p. 195 に, parallel の見られる texts が挙げられている。